

交流の一步が始まった。  
トレイルラン、オリエンテーリング、登山関係者の交流が大きく加速した日だった。

2010年12月27日 東京都品川区  
シンポジウム「森を走ろう」



オープニング挨拶を行う山西 JOA 会長  
シンポジウムには 150 名程度が集まった。

## 仲間同士大いに語ろう

「森を走ることに今までディスカッションし、自己表現することはなかった。これから外部に情報発信する前に、今こそ大いに語り合おう。今回のシンポジウムはその最初だ。」

日本オリエンテーリング協会の山西哲郎会長がオープニングに述べた言葉である。

その言葉の通り、今回はトレイルラン、オリエンテーリング、アドベンチャーレース、登山といった自然や森をフィールドに競技を行う者が集って情報交換を行う貴重な場となった。

## トレイルランを基軸に

今回はトレイルランニングを基軸に話が行われた。シンプルに山道を走るトレイルランニングだが、関連するスポーツとしては、オリエンテーリング、山岳、アドベンチャーレース、陸上競技などあらゆるスポーツとの接点が多い。これらの団体に関連のある人たちが集まった。

40年の歴史を持つオリエンテーリング界が持つノウハウをトレイルランニングやその他のアウトドアスポーツにも役立ててもらおうという意図もあったように思える。



パネリストの皆さん  
杉本憲昭、鍋木 毅、田中正人、番場洋子



トレーニングとしてのトレイルランニングと、女性の観点からの改善要望などを話す番場洋子

## 発見と気づきの場

木村自身がピンときたキーワードを以下に列挙する。こうしたシンポジウムと分科会から得られるインスピレーションは各者各様だろう。

調査結果によると登山者は登山者同士でもコンフリクトを感じている。トレイルランに対してだけではない。(基調講演：村越 真)

これからはトレイルランの全国組織を作る必要があるだろう。(杉本憲昭)

トレイルラン大会は地元にとって勇気を与えてくれる。これが重要である。(鍋木 毅)

トレイルラン大会はアウトドアのよい経験の場である。安全が確保されている中で失敗し学んでもらいたい。

(田中正人)

トレイルランニングは魅力的だが行きづらい。それは手軽さがないから。ファシリティが充実していないから。

(番場洋子)

文化祭のノリで大学オリエンテーリング大会を開催している。(斎藤翔太)

集めたい人がいる場で効果的な広報を行うと驚くほど人が集まる。たとえば女性用のオシャレなサイトなど。参加者に楽しんでもらえるように知恵を絞る。(アドベンチャーディバス)

## イベント運営のマインド

さて筆者木村は分科会より発表者として登場した。テーマは「森の中のランニング大会の作り方」。といってもオリエンテーリングとロゲイニングしか

やっていないので、その内容で話題提供させてもらった。

最初に2010年度に木村が主催もしくは運営参加したイベントを列挙させてもらったが、会場からはちょっとばかりのどよめきが出た。

私の発表内容の趣旨は、こうした多数のイベントを手掛けてゆく上で、そのモチベーションは何か？ 自分を動かすドライビングフォースは何か？ というものである。

結論から言うと、自分自身が楽しいことが一番重要であること。

では、自分が楽しいとはどのような状態なのか？

それは競技自体を自分が楽しいと感じられること。それを参加者が楽しいと感じること。協力者が喜ぶことである。

では参加者が楽しいとはどういうことか？ 協力者が喜ぶとはどういうことか？ そして自分は何が、どこまでできるのか？ そのように考えてゆけばおのずと答えが出るという内容である。

もちろん個々の事例はそう単純ではない。個々の事例に対するノウハウの蓄積は多く持っているがそれをいちいち紹介することはしない。「個別の案件については回答を差し控させていただきます」などと言うと法務大臣は袋叩きに合ってしまったが、個々の事例を語り始めると分科会の時間では足りない。

今回の分科会に参加していただいたかたから、分科会後に直接声をかけていただいて感想をいただいた。こうしたアマチュア的発想が重要なのはメディアの制作側でも同じだそう。

また女性だけでアウトドアを楽しむ「アドベンチャーディバス」の運営も私と似たような発想で事業を進めているというお話もいただいた。

こうした違う分野との交流がまた次回イベントを構想するモチベーションにも繋がるのだろう。

(木村佳司)